

大師山古墳・大師山遺跡  
発掘調査概要

河内長野市教育委員会

1971

大師山古墳・大師山遺跡

# 発掘調査概要

## 大師山古墳、大師山遺跡発掘調査概報

### (I) 大師山古墳

#### 1. 調査経過

大師山古墳は大阪府河内長野市三日市町（旧南河内郡三日市村大字三日市）の通称大師山と呼ばれる丘陵上に位置する。

從来この大師山の松林の中に一堂宇があり、昭和5年、寺域拡張工事に際して、偶然古墳が確認され、副葬されていた遺物が出土し、大師山古墳と名付けられた。この時出土した遺物には石剣、車輪石などの石製品が多く、古式の代表的な古墳として、広く学界の注目するところとなつた。

しかし当時すでに古墳の封土は削平され、古墳としての形状を殆んどとめていなかつた。そして調査終了後は埋葬主体部のあつたと推定される位置に記念供養碑が建立され、それによつて古墳の位置が知られる程度の状態であつた。ところが最近にいたつて、日生不動産株式会社が付近の山林を買収し、続いて河内長野市における中学校統合計画の候補地として取上げられるにいたつた。

文化財行政の担当課である河内長野市教育委員会社会教育課では、保存と開発について苦慮し、開発の手にのみ任せ、何等の配慮もせず消滅することのないよう会社側と再三にわたり交渉を続け、他方文化庁、大阪府教育委員会など関係各庁と協議し、残余の地について発掘調査を実施することになり関西大学文学部考古学研究室の協力によつて調査を遂行した。その結果、從来不明確であつた事項が改めて判明し、学界に対しても寄与することができたと考える。ここにその調査の概要を報告する。

#### 2. 地理的環境

大師山古墳は南海高野線三日市駅の東方約500米、金剛山地から西方に派生する標高約200米の丘陵上にある。この丘陵の西側は急な斜面で石川の右岸に下降し、西北方は視界が開け、石川流域を眺望することができ、晴天時には遠く大阪湾を隔てて六甲連山から淡路島をも遠望できる眺望景勝の立地を占めている。

丘陵据を蛇行して流れる石川は石見川、天見川、加賀田川、高向川を順次合流し、石川本流となつて北流し、富田林市を経て大和川に連る。またこれらの河川は侵蝕度が強く、三日市町以南ではいたるところに峡谷をつくり、V字形の峡谷を形成するいわゆる壯年期山地の地形を呈する。

大師山古墳はこの石川に面する丘陵の一つの丘阜上に存在している。

### 3. 歴史的環境

石川流域における著名な先史時代の遺跡としては国府遺跡、鍋部遺跡、喜志遺跡などを挙げることができる。古墳時代中期には応神陵を盟主とした古市古墳群が築造されるが、その周辺においては18基以上からなる前期の玉手山古墳群、その東北丘陵上に松岳山古墳群が築造された。

石川上流の地域では短甲をはじめ石製模造品などの出土した鍋塚古墳や川西の古墳、地形的には鍋塚古墳の対岸に鏡鑑2面が発掘された真名井古墳（一本松古墳）があり、双円墳という特殊な墳形の金山古墳もある。大師山古墳はこれらの古墳群からさらに石川の上流にある。

周辺の遺跡や古墳群からみて、石川流域は日本の古代において注目すべき地域であるが、特に大師山古墳は先きの工事によつて鏡鑑をはじめ多量の石製品の出土があつたことは考古学上重要な意義をもつものであつた。

### 4. 昭和5年の調査成果

昭和5年、通称大師山古墳で多数の副葬品が出土し、一部について調査が

行われた。当時の調査報告書によると墳形は円墳、埋葬主体部は粘土櫛と推定され、木棺片が出土した。またこの時出土した遺物は次の如きものであつた。

仿製內行花文鏡	1面（径 15.5 cm）		
碧玉製管玉	8個	碧玉製鳥形石	1個
碧玉製車輪石	16個	碧玉製石鉗	13個
碧玉製紡錘車	4個	铁劍（10数片）	3口分
直刀片	1片	木棺片	

以上の遺物は現在東京国立博物館の藏品となつてゐる。

古墳及び副葬品の出土が工事中の偶然ともいべき事情であつたため、出土状態については詳細不明な点が多いが、このように多数の石製品の出土はあまり類似のないものであつた。その際出土した木棺片と車輪石、石鉗片約20片が、コンクリート製の箱に納め、後円部のほぼ中央に埋めその上をコンクリートで覆い、周囲を石で固められ、記念碑が建立された。

## 5. 今回の調査

### ① 墳 形

伝えるところによると大師山古墳は約100年前、地元民が花見場、鍋り場をつくるため墳頂部を削り、その土砂を墳丘傾面から墳丘裾部へく排土、平夷し、さらにそれより10年程後にも整地が行わったといわれている。また昭和5年にも前記遺物が出土する契機となつた工事も行われ、少なくとも3回以上にわたつて墳丘が削平された。そのため墳頂部が平坦となつていたため、外形の形状は明確でなかつた。

しかし今回の外形実測の結果、かなり変貌しているが、前方後円墳であつた可能性が強いことが判明した。

今回の調査は先きに大阪府教育委員会によつて実施した確認調査の際に設定されたトレンチ壁面に見られる有機質の黒色土層の追求からはじめた。このことより黒色土層より上の層位は墳丘を削平したとき斜面に排除された盛り土および地山であることやこの黒色土層は旧墳丘地表面であることが確認された。そして多數のトレンチによつて判明した黒色土層を測量した結果、発掘調査着手前測量した実測図より一段と形態の整つた前方後円墳になつた。大師山古墳の築造当初の原形が前方後円墳である場合、何回かの工事による排土はくびれ部付近から後円部中央の南斜面に多く、このなかから遺物を検出した。なお後円部の後側すなわちこの古墳では西側はほとんど排土の堆積がみられなかつた。したがつて大師山古墳は主軸をほぼ東西に置く全長約60mの前方後円墳であつたと推定復原することができる。

## ② 主体部構造

後円部南斜面の排土中より粘土塊、赤色顔料と共に石製品が出土し、先きの昭和5年には木棺片が出土していることから、後円部中央に粘土櫛をもつて埋葬主体部とした可能性が強く感じられる。

## ③ 出土遺物

今回の発掘調査によつて出土した遺物は下記の通りである。

### ④ 後円部中央コンクリート櫃内（昭和5年再埋蔵されたもの）

石劍片 6片（3個体以上） 車輪石片 16片（5個体以上）

木棺片

### ⑤ 後円部南斜面の排土堆積層

石劍片 20片 車輪石片 5片

管玉 1個 墓輪片 若干

赤色顔料（石製品出土地点を中心にその周辺各所）

(c) 後円部北斜面の排土堆積層

埴輪片 若干

(II) 大師山遺跡

1. 調査経過

昭和44年10月より行われた大師山古墳の調査中、仮称2号墳裾部より弥生式土器の出土が見られ、又、地元の人より、以前に採集したという弥生式土器の寄贈があり、大師山丘陵上にも弥生遺跡のあることが考えられたのであるが、古墳調査中には、弥生時代の遺構を検出するには至らなかつた。

ところが、昭和45年2月に、大師山丘陵周辺の分布調査を行なつた結果、工事の為に設置された道路の各所に、弥生式土器を伴なう包含層が露出しているのを確認し、河内長野市教育委員会、日生不動産と協議し、3月2日より約2ヶ月間発掘調査を行つた。

調査区域は、大師山古墳と2号墳のある、東西に延びる丘陵上で、特に包含層が多く見られた2号墳からSa 31号地点を中心としてトレンチを設置した。その結果、2号墳北西裾（Sa 20地区）と、Sa 31地区より、弥生時代後期の竪穴式住居が検出され、Sa 31地区から窯跡3基が検出されたが、丘陵上は道路設置の為、すでに削平されており、他に遺構面を認めることができなかつた。しかしながら、遺物流出の可能性があると思われる斜面部にトレンチを設置した結果（Sa 20地区北東斜面、21地区北東斜面、31地区北東斜面、同南斜面）、流出土中より多量の弥生式土器が出土すると共に、Sa 21地区、同31地区より、炉跡状特殊遺構を検出した。

2. 遺構

## (1) 住居址

### 1号住居址

東西に延びる尾根の平坦面に位置し、円形の竪穴式住居（径約9m）と考えられ、北側は工事用道路、東側は溝状遺構によつて畿されて、4分の1ほどが残存しているのみである。このあたりは最近まで畠となつていたため、住居址の上部が相当削られ、竪穴式住居特有の側壁を検出することができず、周溝（巾約15cm、深さ約10cm）によつて規模の程度を知ることができた。住居址内には11のビットがあり、中央部と考えられるところより、灰が堆積したビットが検出された。また、南側には焼土が一部遺存していた。住居址内より畿内弥生式土器第V様式と推測される甕が2個出土しており、この1号住居址が存在していた時期も、やはりこの時期であつたろう。

東側を巾約2m、深さ約40cmのU字状の溝状遺構が南北に延びており、溝中より弥生時代の石鎌1本と若干の土器片が出土している。溝状遺構と住居址との相互関係は、なお、検討を要するものがある。

### 2号住居址

2号住居址も畠などの開墾により上部が相当削られ、また、後の時代のものと思われる大きな穴があつて、全体を把握することはできず、とくに北西側はビットすらも検出することができなかつた。

南側から住居址の側壁が検出され、やや隅丸の観を呈しているが、円形の竪穴式住居（径約9.5m）であろう。側壁の下より、溝状遺構が一部検出された。この溝状遺構が住居のまわりをめぐる周溝の一部であるか、あるいは、当住居を拡張、立替えの際の残存遺構であるか目下検討中である。ビットが検出され、それぞれのビットの有機的結合関係は判明し難いが、

相当密に存在しており、何回も立替え修復したことがわかる。弥生式土器と考えられる破片が若干出土した。

構築時期は明確ではないが、諸般の条件より考察して、戦内第V様式の前後と考えるのが妥当であろう。

#### ② 炉跡状特殊遺構

大師山古墳南側くびれ部斜面、同前方部北斜面、Sa 31地区丘陵上、同北東斜面より検出された。31地区北東斜面のものが方形であつた他は、すべて円形もしくは、橢円形のもので、いずれも径1m内外、深さ30~50cmのもので、周壁はすべて焼成を受けて赤褐色を呈しており、内部には、灰層が堆積しているが、遺物は認められず、底面も焼土は認められなかつた。遺構は、Sa 21地区と31地区北東斜面のものは、流出土上に設置されており、弥生式土器流出後に設置されたものと考えられるが、設置時期、及び、その性格は明らかではない。

#### ③ 黒 跡

Sa 31地区残丘西裾より1基、同東裾より2基検出された。いずれも長さ2~3m、巾1m内外の半地下式平窯で、煙出し部も認められたが、灰原は残存しておらず、窯体内からも何らの遺物も出土しなかつたため、築造時期、性格は明らかでない。この3基の他に、大師山山塊北端の谷間に面するより3基検出されたが、造成工事の為調査できず、写真撮影を行うにとどめた。

#### ④ 出土遺物

第1号住居跡より壺、甕などの弥生式土器、第2号住居跡より鉄鏃1点、叩き石、凹石、及び壺、甕などの弥生式土器が出土したが、上面が削平されていたため、殆んど流出してしまつたと思われ、量的にはすくなかつた。

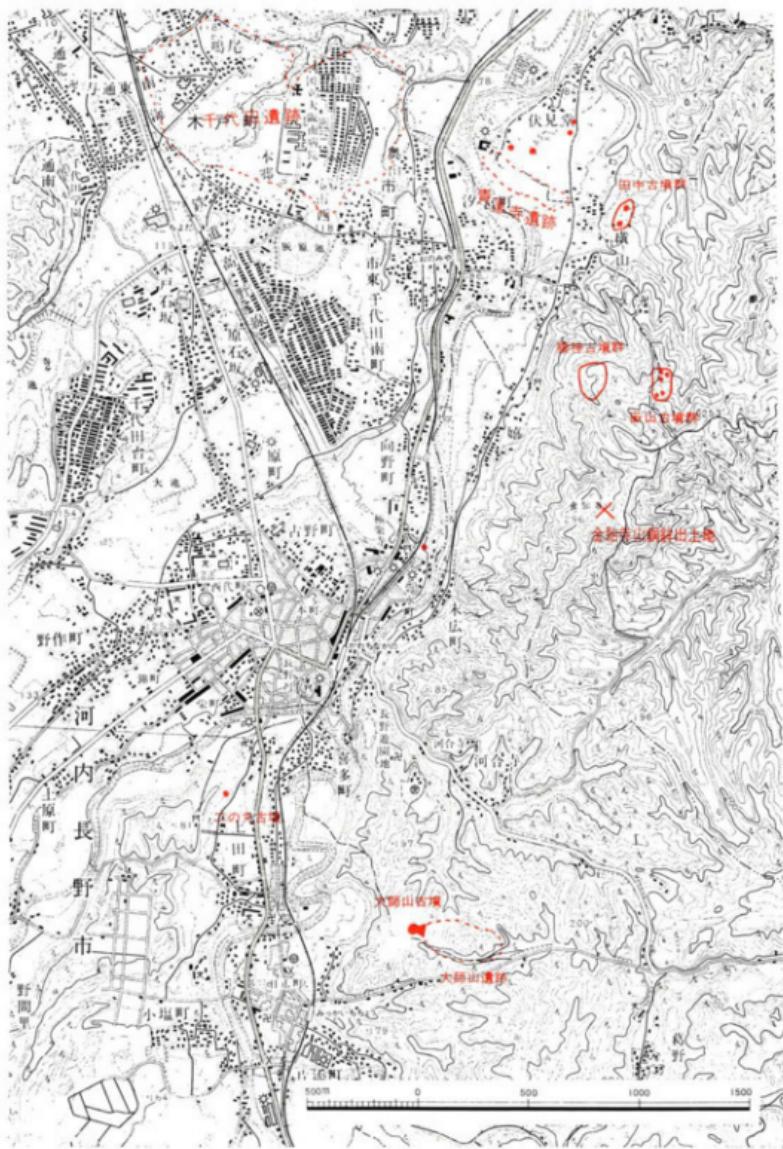
しかし Sa 21 地区、Sa 31 地区の斜面流土中より壺、甕、長頸壺、高壺、手焙形土器などの弥生式土器が多量に出土した。それらの土器は主として磨古第 V 様式のものである。2 号墳より須恵器、瓦器、土師土皿等の破片が数個出土している。

### (III) 総 括

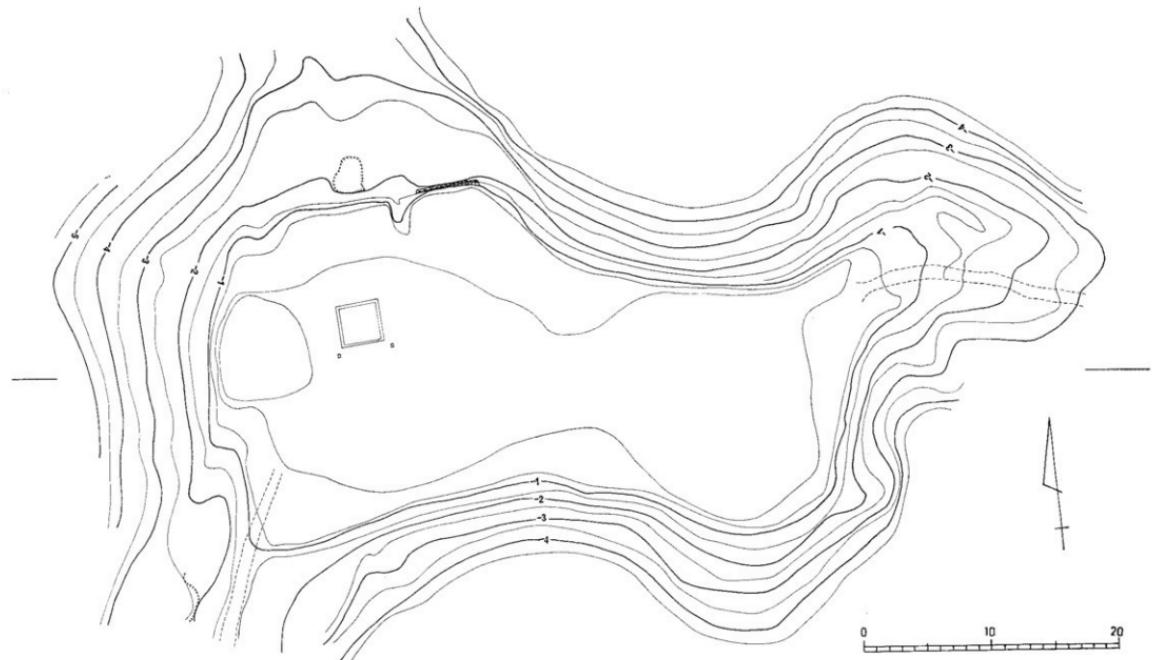
昭和 5 年、大師山古墳から内行花文鏡、車輪石、石鉗等の出土があり、広くその存在が知られるようになつたが、その時すでに封土の殆んどは平夷されてしまつた。今回は土木工事による事前調査として実施したが、従来円墳と考えられていたこの古墳はトレンチ調査によつて丘陵上に築造された前方後円墳であることをほぼ確認した。そして、石製品の副葬が今回の出土によつてその数がさらに増加した。また大師山古墳の所在する周辺の丘陵上に弥生式土器の散布地があり、発掘調査したところ、僅かに残存する程度であつたが住居跡、堀の一部、更に窯跡などの遺構を検出した。これらはそれら出土遺物よりみて畿内弥生式土器第 V 様式の時代のものである。最近弥生式時代後期における高地性集落の形態やその背景について重視されている。大師山遺跡はその立地よりみて高地性集落の様相を示すものであり、今回の発掘調査によつて新しい資料を提示といえる。今後はこうした資料の増加によつて弥生住居跡の課題を追求していきたい。なお 4 世紀代の築造と推定される古墳と弥生式時代後期の住居跡との関係も新たな研究課題である。しかし大師山古墳、大師山遺跡が調査後消滅してしまつたことは、文化財保存の立場から惜まれる。

出土した遺物は将来この地に創館される資料館（仮称）において保存、陳列され、一般に公開する予定である。

# 図 版



大師山古墳位置図



大師山古墳実測図

図版第一 遺跡全貌



圖版第二 大師山古墳



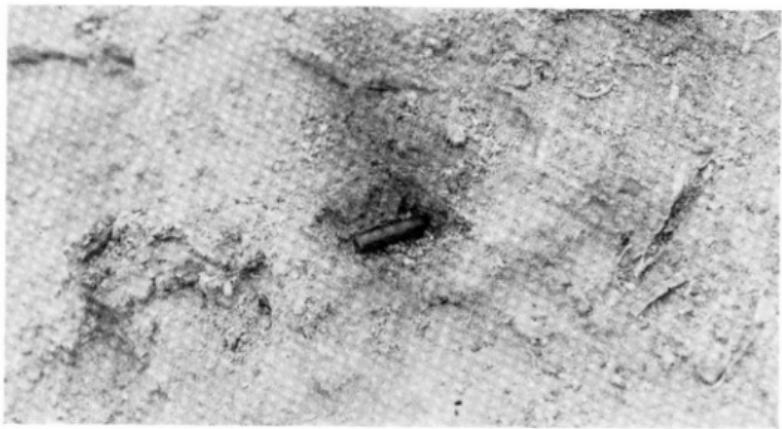
圖版第三 大師山古墳



圖版第四 大師山古墳



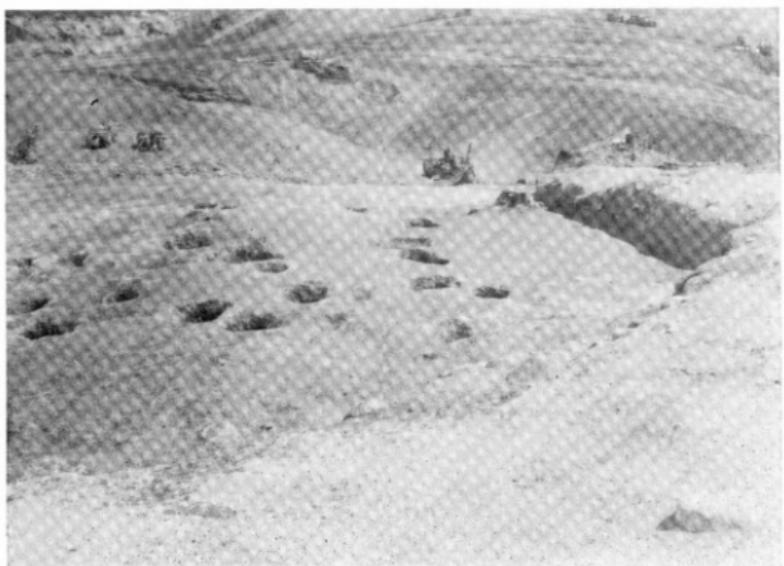
圖版第五 大師山古墳



圖版第六 大師山遺跡



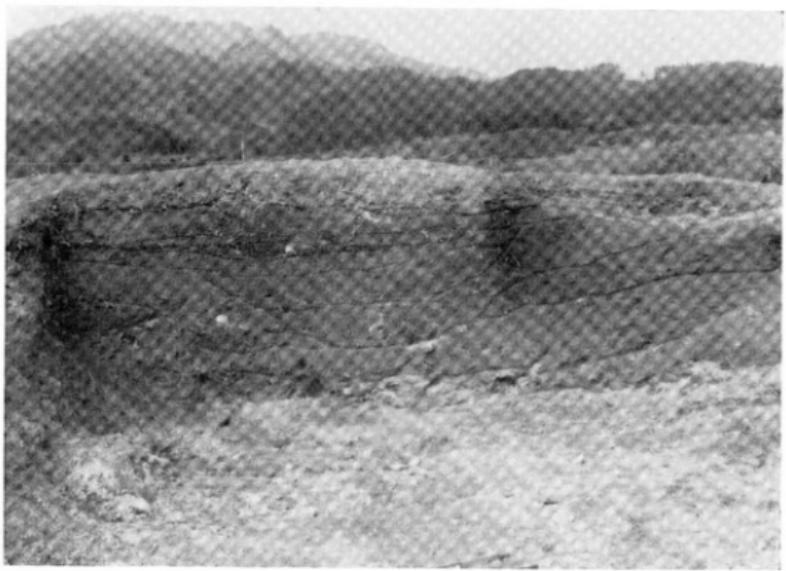
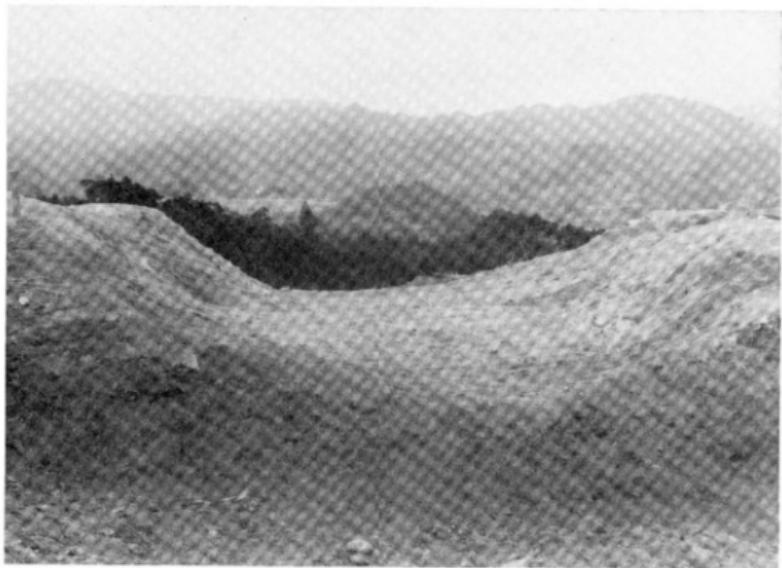
圖版第七 大師山遺跡

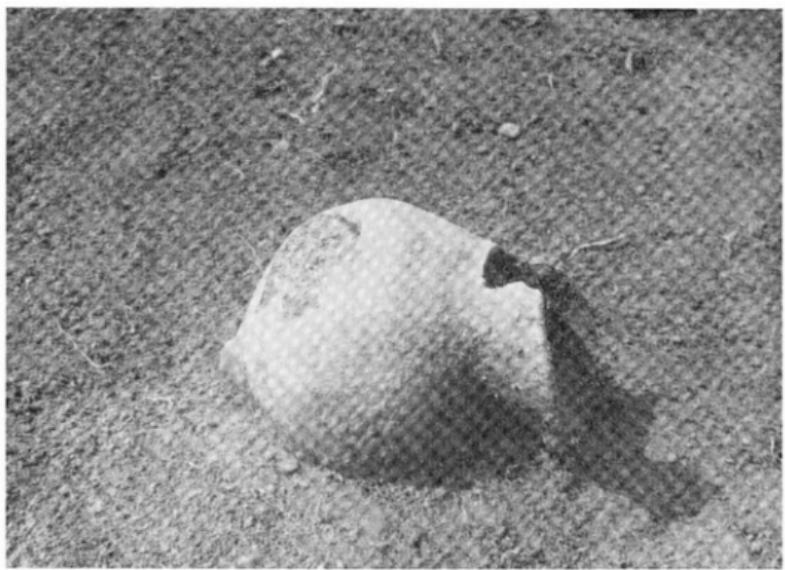


圖版第八 大師山遺跡



圖版第九 大師山遺跡

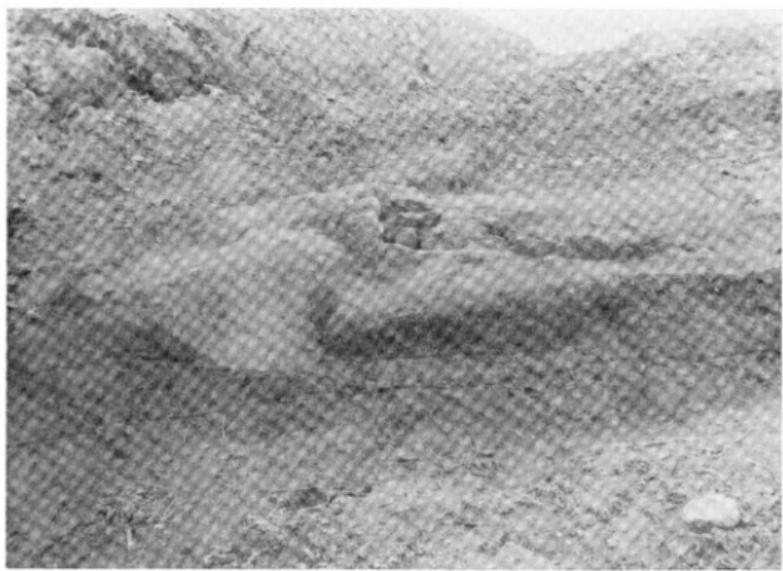




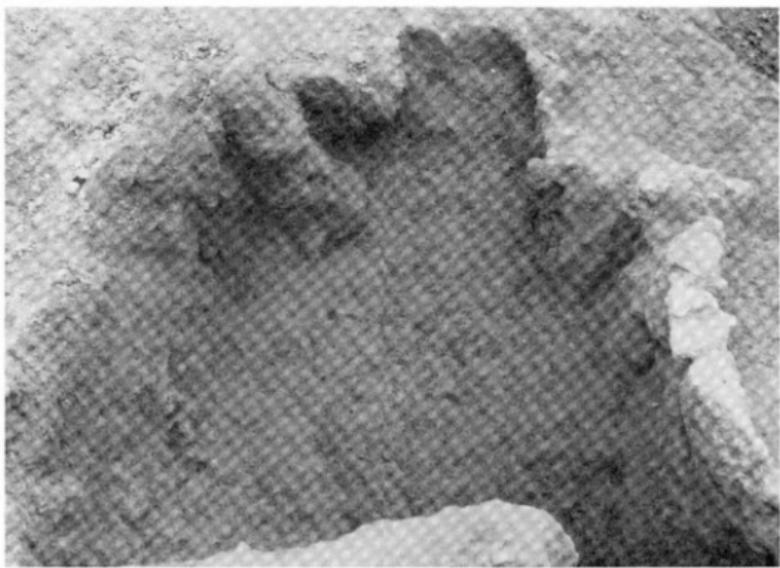
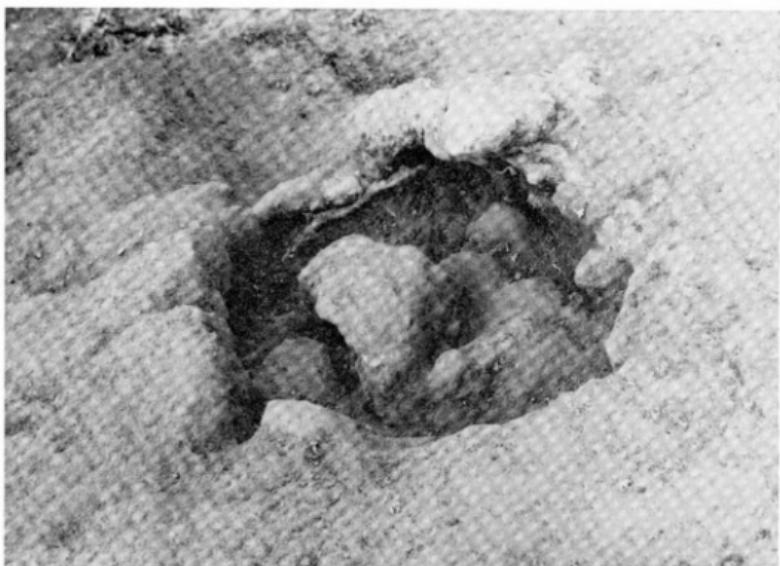
圖版第一一 大師山遺跡



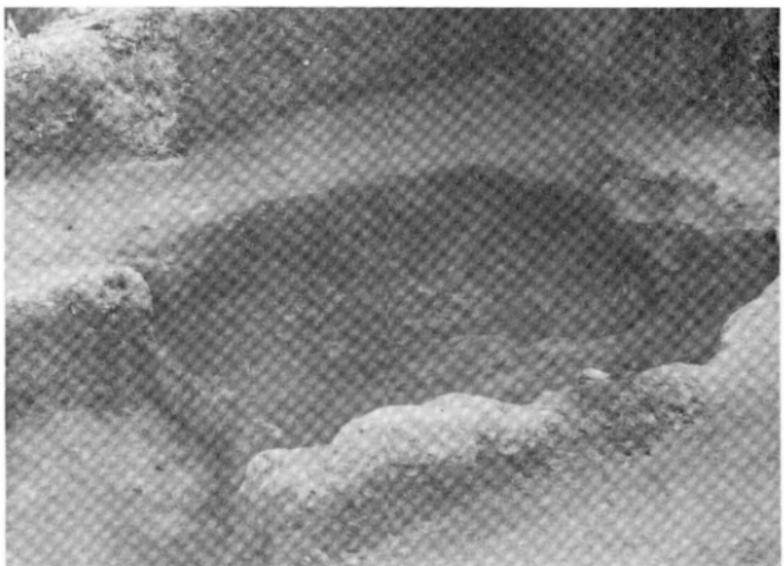
圖版第一二 大師山遺跡



圖版第一三 大師山遺跡



圖版第一四 大師山遺跡



圖版第一五 大師山遺跡

